

INSAT からの眺め

櫃 間 道 夫*

インドの静止衛星 INSAT (74° E の赤道上) の画像を紹介する。1985年5月25日、バングラデシュに何万もの死者・不明者を出したサイクロンの写っている時のものだが、まず、画面全体を眺めよう (口絵写真1)。

西半分に雲が少ないことに気付く。この時刻はインドの地方時で正午近く、ペルシア湾でも朝9時すぎだが、ほとんど雲が見えない。アラビア半島 (X) がほのかに白いのは砂漠の反射だ。彼の T.E. ロレンスがアラビアに身を投じた日々にも、このように、うんざりするような晴天が、砂漠の上に拡がっていたのだろうか。

黒海やカスピ海には僅かながら雲が見える。この雲との関連は不明だが、二、三日前、中央アジアの草原地帯を、小さな温帯低気圧性の雲システムが東進して行った。

ヒマラヤ山塊西部 (Y) にシダの葉のような形で白いのは、万年雪を頂く嶺々だ。その南東 (Z) では雪よりもむしろ積雲が卓越している。そして、それらの白に混じって点々と黒く湖水が見える。この辺は、右に添えた GMS の写真の方が鮮明だが、このような高原の、恐らくは人跡まじれた奥地の湖の水面は、どんな表情をしているのだろうか。

さて、問題のサイクロンを見よう。中心とおぼしき所に円形の厚い雲塊があり、それを北から東に取り巻いて、二、三の雲バンドがある。このあたりも、斜めから

見る GMS 画像と併せて眺め、脳裡で組み立てると、林立する積乱雲列の渦巻くさまが浮かび上がって来るではないか。

この25日に先んじて、21日からのサイクロンの発達の経過を口絵写真2に示す。21日にはベンガル湾中部に広く分布していた積乱雲クラスターが、日を追ってコンパクトにまとまりながら北上し、ほぼ完全な円形の雲システムになった所で上陸した。

ただし、雲域の大きさからみてこのサイクロンは、太平洋の台風と比べてむしろ小ぶりなものだし、また、“眼”が見えない等の特徴からしても、特に強いものとは思われない。それにもかかわらず大被害をもたらしたのは、ガンジス河のデルタ地帯という地勢上の条件とか、防災体制などの要因によるものかと考えられるが、詳しいことは判らない。ともあれ、気象現象としては特に目を惹くほどのものでないという、その事実こそ注目されるべきだろう。

なお、この INSAT は、WMO が作った世界の気象衛星ネットワークの中には入っていなかったもので、現在も、画像をはじめ各データが、日本など外国には配信されていない。残念なことである。

(ここに示した画像は、気象庁企画課気象衛星室の方々のご努力によって特別に入手された。また、本誌への掲載については、インド気象局から諒解を頂いた。併せて感謝を述べたい。)

* Michio Hitsuma, 気象衛星センター。

INSAT からの眺め

(説明は 52 ページ参照)

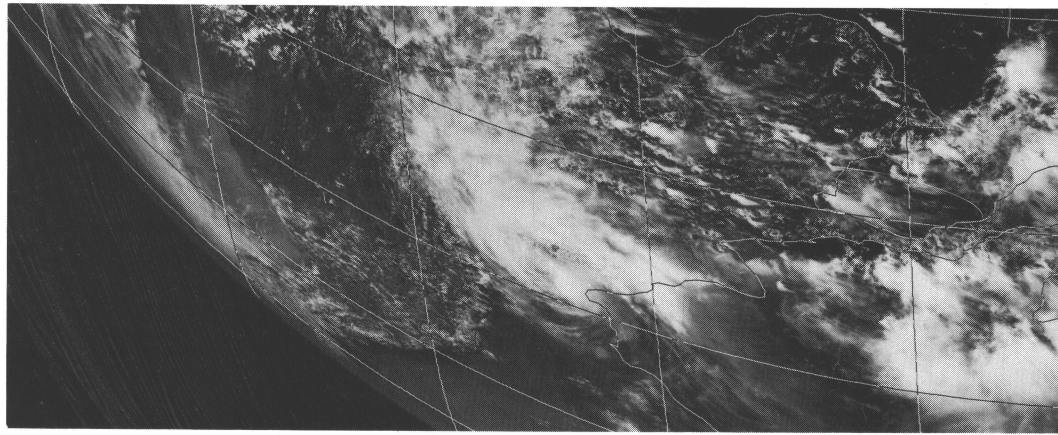
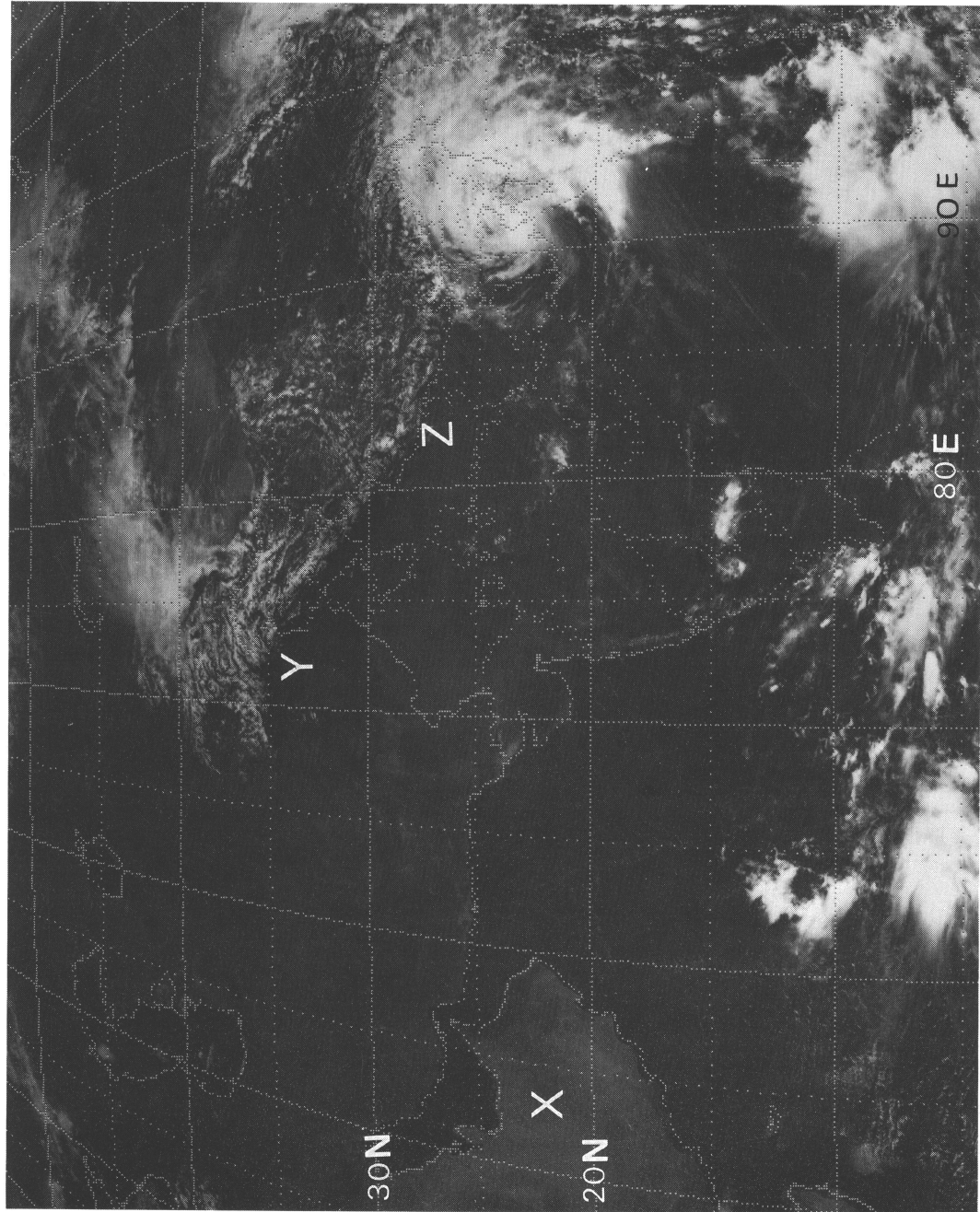
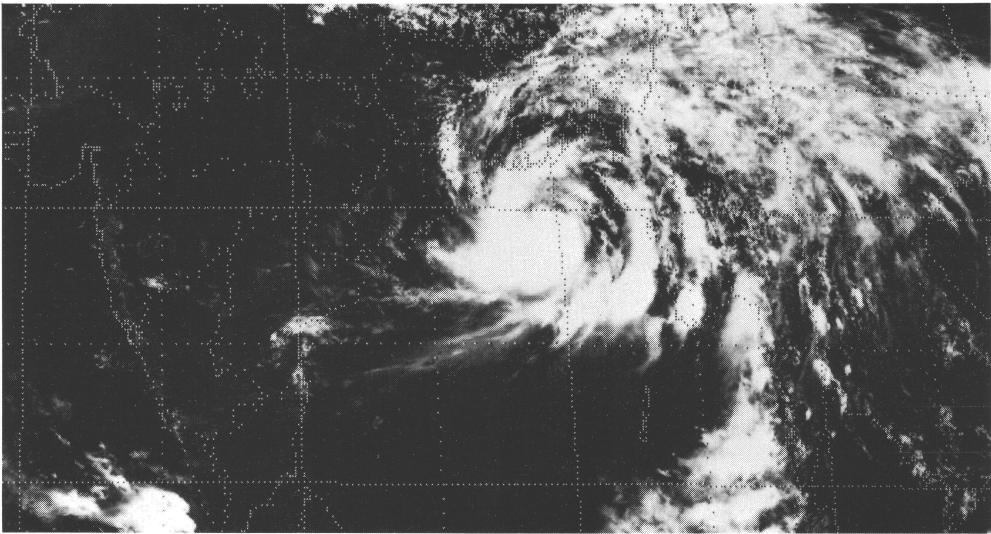
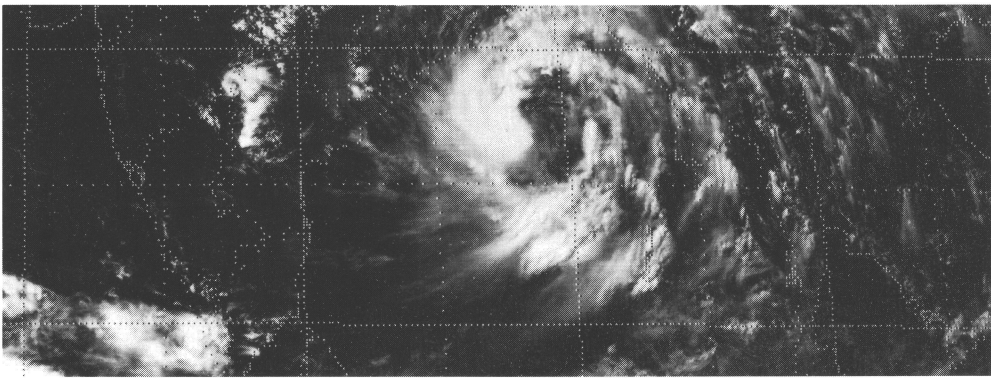


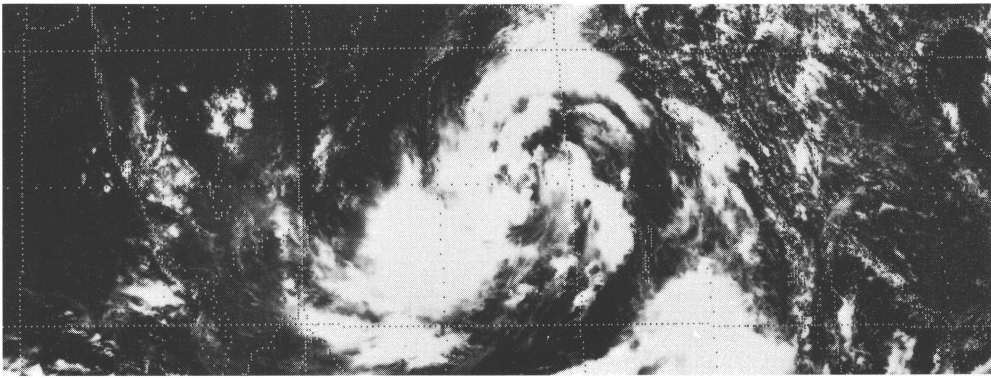
写真 1. INSAT の可視画像, 1985 年 5 月 25 日 06 Z. 右に添えたのは同時刻の GMS 可視画像.



24日



23日



22日



21日

写真2 INSATの可視画像。下から順に1985年5月の21, 22, 23, 24日の06Z.